長與善郎
野上彌生子集

24

現代文學大系

長與善郎
野上彌生子 集

現代文学大系　24

筑摩書房

現代文学大系24　長與善郎　野上彌生子　集

昭和四十二年二月十日第一刷発行

著　者　長與善郎　野上彌生子

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装　幀　真鍋博

本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

長與善郎集　目次

青銅の基督　五
竹沢先生と云ふ人　六五

野上彌生子集　目次

真知子　二八三
明月　四八一
年譜　五〇〇
人と文学　瀬沼茂樹　五一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

長與善郎集

默如石
沈潛亦石

青銅の基督

――一名南蛮鋳物師の死

一

父秀忠と祖父家康の素志を継いで、一つにはまだ徳川の天下が織田や豊臣のやうに栄枯盛衰の例に洩れず、一時的で、三代目あたりからそろそろくづれ出すのではないかと云ふ諸侯の肝を冷やす為めに、又自分自らも内心実はその危険を少からず感じてゐた処から、さし当り切支丹を槍玉に挙げて、凡そ残虐の限りを尽した家光が死んで家綱が四代将軍となつてゐた頃の事である。

実際、無抵抗な切支丹は、所謂柔剛その宜しきを得て、齢に似合はずバキ〳〵と英明振りを発揮して、早くも「明君」と云はれた家光が、一方「国是に合はぬ」事は何処迄も厳酷に懲罰して仮借する処がないと云ふ「恐ろしさ」を諸侯に示すには得易からざる無難な好材料であつた。「何と云つてもまだあの青二才で」と高を括つて見てゐるらしく思はれた諸侯達を、就職のとつ始めから度胆を抜いてくれようと思つてゐた若将軍の切支丹に対する処置の酷烈さと、その詮索し方の凄まじい周到さとはたしかに「あはよくば又頭を擡げる時機も」と思つてゐた諸侯の心事を脅し、その野望を断念せしめて行くには効き目は著しかつた。奥羽きつての勢力家で、小心で、大の野心家であつた伊達政宗さへ、此年少気鋭な三代将軍の承職に当つて江戸に上つた際、五十人の切支丹の首が鈴ヶ森で刎ねられるのを眼のあたり見て、その耶蘇教に対する態度をガラリと変へた程であつた。

かくて何でもかんでも徳川の基礎を万代に固める事が自家一代の使命であると心得てゐた家光は諸侯と直接刃を交へて圧迫するやうなまづい手段に依らずに、諸侯がとも角も同意しない訳に行かぬ理由と名義の下に、此日本の神を否定し、仏を否定し、国法を無視し、羊のやうな柔和な顔をして、其実国土侵略の目的を腹に持つてゐる狼の群を鏖殺しにする事に依つて、間接に徳川の威勢を天下に示し、同時に自分の反照を眼のあたり見る事が出来る事を此上もなく面白がり、喜んだ。何となく気味のわるかつた姻戚の伊達政宗迄が思ひがけない奥羽での切支丹迫害の報告書を奉つた時、彼は自分がもうそれ程迄におそれられてゐるのかと云ふ得意の為めに、まだどこか子供々々した俤のぬけきらぬ顔を赭くし、バタ〳〵とその書面を叩き乍らそれを奥方に見せに座を蹴つて立つた程であつた。

併し切支丹が神の道と救ひの教へを説くと称して実は日本侵略が目的であると云ふ事は只彼の構へた口実ではなか

つた。実際彼はさう信じてゐたので、それは又その筈であつた。朝廷に最も勢力のあつた神道主義者と仏僧との耶蘇教に対するあらゆる反対讒訴姑息な陰謀は秀吉時代からの古い事であつたが、まだその他に商業上の利害の反目からフランシスコ・ザエリオ以来日本の貿易と布教とを一手に占めてゐた葡萄牙人を陥れようとして、元来西班牙の広大な領土は宣教師を手先に使つて侵略したものだと実しやかに述べ立てる西班牙人があり、又家康の時には更に西班牙と葡萄牙とを商敵とする新教国の和蘭人が現はれて家康の前に世界地図をひろげ、耶蘇教国の君主すら宣教師を危険視して国外に放逐してゐる位であるなぞと云つて眼の前で十字架をへし折り、聖母の画像を踏みつけて見せた事もあつた。のみならず捕獲した葡萄牙の商船から発見したものだと称して偽造の密書――所謂「和蘭の御忠節」を勿体らしく捧呈したりしたのである。

さなきだに切支丹には誤解される点が実に多かつた。罪を犯して悔い悲しむ者は、罪を犯さぬつもりでゐる過ちのない傲慢な者より救はれ易いと云ふ意味が罪その物を肯定する教と見做された事も当然な事であつたが、又霊魂の救はれる事の為めに肉体の死苦を甘んじると云ふ事がやがて死の讃美に思はれ、そしてその死に民衆を「嗾かす」ばてれん達は又国民を亡ぼして行く者と見做された事なぞも凡て尤もな事には相違なかつた。

かつ慶長の初めには疫病が流行り、天変地異がつゞいた。こんな事を仏僧や神官が神仏の怒りとして持ち出さずにはおく訳はなかつた。秀吉はそれには耳を藉さなかつたが、切支丹の一婦人に懸想してその婦人を妾にする事が出来なかつた時、始めて本当に切支丹を憎いと思つた。彼はその女を裸にして竹槍で突き殺させた後で、今日吾々が子供の時から耳にタコが出来るほど学校で聞かされた常套語の元祖を放つた。

「外国の土に善く適ふからと云つてその木をすぐ日本へ持つて来て植ゑると云ふ事は間違つてゐる。日本には日本の桜がある。」

そして自ら朝鮮を侵略して行つた此猿英雄は一度でそれが懲らし得るつもりで、先づ廿六人の「侵略者」を長崎の立山で磔刑にし、虐殺の先鞭をつけた。

家康は秀吉よりも一層切支丹を最初から嫌つてゐた。徳川の運命と同じく、切支丹の運命にとつて致命的であつた関ヶ原の決戦が済み、切支丹の最も有力な擁護者であつた石田三成、小西行長、黒田孝高等が滅び失せて後は元和八年の五十五人虐殺を筆頭に露骨に切支丹迫害が始められた。かくてそれ迄は自ら洗礼をうけ、或は切支丹に厚意を持つてゐた西国の諸侯は幕府の嫌疑を怖れるが故に改宗し、切支丹の討伐にかゝつた。そして爾後切支丹の根絶やしは徳川家代々の方針となつた。

寛永十五年正月、島原の乱が片付き、続いて南蛮鎖国令が出て後、天文十八年以来百余年の長きに亘り、二千人以

上の殉教者と三万数千人の被刑者とを出して尚執ねく余炎をあげてゐた切支丹騒動なるものは一段落ついた様に見えた。

「一つ時はほんに日本全国上下を挙げて靡いた位えらい勢ひぢやつたもんぢや。信長が本能寺で討たれた頃にゃ三十万からの生粋の信者がをつた相な。それが此通り消え細る迄にやお上の仕打ちも随分と思ひ切つて酷ごいには酷ごかつたが、片つ方も、亦執つこいとも執つこいもんぢやつた。がかうなつて見れや此れや此国に切支丹が容れられなかつたと云ふなあ、夫が結局天主の御所存ぢやつたのかも知れんてな。」

こんな疑念がひそかに切支丹に厚意を持つ人々の念頭にもきざしかけてゐたその頃の事である。それでもなほ全国市町の要所々々には

定

きりしたん宗門は累年御禁制たり、自然不審なるもの有之者申出づべし、御褒美として

ばてれんの訴人　銀三百枚
いるまんの訴人　銀二百枚
立ちかへり者の訴人　同　断
宗門の訴人　銀百枚

同宿並にかくし置き他より顕はるるに於ては其処の名主並に五人組まで一類共可処厳科也、仍下知如件

奉行

と認めた檜の高札がいかめしく樹てられてゐた頃の事である。

長崎の古川町に萩原裕佐と云ふ南蛮鋳物師がゐた。

二

「おい。お佐和。此間のあの『虎』をどこへやつたんだ。」

「よくもかう珍なものを集めたものだ」とつい人がをかしくなるほど煤ぼけた珍品古什の類を処狭く散らかした六畳の室の中を孫四郎は易者然たる鼈甲の眼鏡をかけて積んである絵本を跨ぎ、茶盆を跨ぎして先刻から机の上、床の間、押し入れの中と頻りに引つくり返して何か探してゐたが、かう荒々しく声をかけた。

「ぬしは又売つちまつたんだらうが。え？　俺にかくして。」

孫四郎の調子にはもうやゝ、刺があつた。その刺にさゝれて、隣りの四畳で針仕事をしてゐた細君はやぶれた襖をあけた。

「まあ、『又』なんて誰がいつそんな事をしましたらうか。」

やゝ上気した頬の赭味のために剃つた眉のあとが殊に蒼く見える細君はかう云ひ乍ら羞ぢらひげに微笑んだ会釈を客の裕佐の方へなげ、「まあ、此散らかし方！　まるで屑屋さんのやうですわ。」と尻上りの調で云つて一寸突つ立つた。

「貴様、探して見い、ありやせん。」

孫四郎は邪慳にかう云ひ捨てて敷けば却つて冷た相な板のやうに重い座蒲団をドサリとわきへ放りなげ、長煙管の雁首で、鉄に銀の象嵌をした朝鮮の煙草箱を引き寄せ乍らその長い膝をグツと突き出して坐つた。

「それやこんなものよりやずつと傑作ぢや。此間の縁日の虎を早速やつて見たんぢやがな。」

彼はかう云つてひよろ長い体の居ずまひを直し、裕佐が縁近く持ち出して胡坐をかいて見てゐた一枚の絵を煙管でさした。それは山田長政が象に乗つて暹羅の国王の処に婿入をする図で、版画にする原画であつた。

「ほうら。ありましたがな、こんな処に。矢つ張り貴郎が御自分でお蔵ひになつたんですわ。」

細君は嬉しさの余り長い白い脛を一寸あらはして、束になつてくづれてゐる錦絵を跨ぎ、安心と怨めしさとが一緒になつて堅くなつた表情を向け乍ら一枚の絵を夫に渡した。そして「いつだつてかうなんですの。」とやゝとげ〳〵しく云つて、そのとげ〳〵しさに自ら上気した顔を更にぽつと赭らめ乍ら裕佐に笑顔を見せ、チラリと又夫を顧みて、次ぎの間へ去つた。

「あつたか。」孫四郎はうけ取り乍ら一言かう言つて、大事さうにフツと一息かけ、

「こゝへ来て御覧。こゝの方がまだ明るい。」

と云ひ乍らその絵をサラリと敷居の上へなげ、飲み残しの冷たい茶をゴクリと一息に呑むと今度は眼鏡の球を袖口でこすり乍ら下から覗き込むやうにじろり〳〵と裕佐の顔を視入るのだつた。

諏訪神社の縁日に虎の見世物が出て非常な人気を博した事はついその十日程前の事であつた。孫四郎の絵ではその虎の檻が街頭に引き出されてゐる。「朝鮮大虎」「大入大入」「大人一文小児半文」と書いた札を背にして切りに客を呼んでゐる男が一方にゐる。かと思ふと張り子のやうな虎が檻一杯に突つ立つていかめしく睨んでゐるその檻の前には「おらんだ人」と肩書きのある紅毛碧眼の異国人が蝙蝠傘をさした日本の遊女と腕を組んで、悠長にそれを見物してゐる。ステッキをついて猩々のやうに髯を生やした馬鹿に鼻の高い「おろしや人」が虎よりは見物人の方を見乍ら長閑にパイプを喫かしてゐる。大小をさした丁髷の侍のわきには日本の子供と中国の子供とが遊んでゐる。——

「ふむ。——」裕佐は思はずその絵のユーモアに微笑まされた。「なるほどこれや面白い。」

「近来の傑作ぢやらうがな。ヘツヘ」

むしろ好んで皮肉を衒ふやうなその歪んだ口許に深い皺を寄せ乍らにや〳〵と傲りがに裕佐の顔を見てゐた孫四郎はかう云つて高く笑ひ出した。

「傑作ですね。版にしたら又一しほ面白いでせう。」

その笑ひ声の下品さに嫌気を感じ乍らも裕佐はかうほめざるを得なかつた。「あの虎は君が画くと面白からうと僕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

も思つてゐたんです。」

「へ、へ。中々見逃しやせぬよ。」

と孫四郎は又雁首に煙草をつめながら、

「往来にさらしてある見世物に『大入』はをかしいが、そこがかう云ふ愛嬌ぢやでな。」かう云つて又笑つた。たしかに齢よりは十位老けて見えるがその実漸く四十になつた許りの此絵師は当時長崎きつての唯一の版画師であつた。

実の処裕佐は口に出してほめた上に内心感服――むしろ驚いてゐたのであつた。「実際変な奴だ」と彼は思ふのだつた。人間としては猶ほ更の事、画家としての孫四郎にも彼は決して飽き足りてはゐなかつた。孫四郎は趣味のみに生き、自分は趣味のみに生きる事は出来ない。趣味のみに生き得る孫四郎の趣味はどうしても偏頗で局部的であり深みがない。自分はよし趣味によつて絵筆を執り、鑿を把る事があるとも、その趣味はいつしか消えて見えなくなり、それに代つて全身の心が現はれ、直ちに万人の心をピタリと打つ底の生ける魂が儼として作品を支配しきる処迄行かなくては気がすまない。

孫四郎の画くものが現に面白い事は否定出来なかつた。唯「面白い」と云ふ丈けにすぎぬ芸術は所詮二流以上のものではあり得ないと裕佐は思つてゐた。併しその一流の境を求める自分はまだその梯の窺はれる仕事すらしてをらぬのに、孫四郎はとも角その「面白い」自家の一道を既に摑まへてゐる。「山田長政」や「虎」の絵にはその「摑んだ」と云ふ感じが顕著に出てゐる。そして彼はその狭い道の上で傍眼もふらずにめき〳〵と進みつゝある。孫四郎の到底了解し能はぬ底の傑作にも広く共鳴を感じ得る自分は、まだその広汎な理解と燃えたぎる深い内心の欲求とを寸分も生かして居らぬのに孫四郎はとも角その卑俗な趣味の偏狭に徹底して、それを自家の製作の上に生かし、悠々自適してゐる。かくて裕佐はその先輩に飽き足らぬ乍らも一方羨ましく思ひ、その「面白さ」さへもない自己の仕事を顧みて淋しく感ぜずにはゐられなかつた。

「どうも僕は少しいろんなものに引かれすぎるのかな。」

裕佐は思はずかう嘆息を洩らして破れ芭蕉の乱れてゐる三坪ばかりの庭の方を向いた。

「いろんなものに引かれるのは結構ぢやないか。つまりそれ丈け、おぬしは眼があるのだからな。」

さう出られれば「勿論」と裕佐は云ひ度くなるのだつた。しかし自分の裡にはたしかに孫四郎なぞの窺ひも得ぬ何かがあると自信してはゐるもののまだその現の証拠を実現した訳ではない。実現して眼のあたり見た上でない以上矢張り内心不安であり、空虚である。畢竟誰にでもある単なる自惚れ、架空の幻影ではないかと疑ふ。自分で疑ふ位なら人が見縊る事に文句は云へない。

「とに角僕は何か一つの道に徹底したいよ。差し当り僕はどうもその事を願はずにはをられない。自分が結局どの道にも徹底出来ない質なのでないかと云ふ気がどうもして

な。」

裕佐は又おとなしくかう云つてかゝへた膝をゆすぶつた。

「ふむ、徹底すると云つたつて、こんな一文や二文のおもちゃ仕事に徹底したんぢやおぬしは満足は出来なからう。もつとえらい仕事でなけれやな。――わたしの仕事なぞは貧乏人の子供相手の乞食仕事だ。之れで随分丹精はして造る。こんな阿呆らしいやうな絵草紙一枚だつて見かけよりや骨を折つとるんだ。しかしいくら骨を折つたつて結局子供だましの夜鷹仕事だ。でもこんなのらくらの遊び人の絵をとも角も一文や二文で買つてくれ手があるから不思議さな！　どうで雪舟も山楽も拝む事の出来ぬ肴屋や八百屋の熊公八公がわたしの御上客だ。殿様だ。それがわしには相応しとるて。ヘツヘツヘ。奴等にや又わしのやうな乞食絵師が相当しとるんだ。だからわしのやうな者もなけれやならんのさ。雲上人相手の白拍子ばかりぢや世の中は足らん。熊公八公相手の夜鷹もなけれやな。どうだ。君も徹底して夜鷹になるか。」

孫四郎はかう云つて煙脂だらけの黒い口をあいて笑つた。

裕佐が此版画家に対して何よりも嫌に思ひ、それがために友に飢ゑてゐ乍らもさう繁々と訪ねて深くつき合ふ気にどうもなれなかつたのは実に此男の下等な偽悪趣味であつた。

人の心持ちを何でも下等に浅薄に解釈して独り見抜いたやうな得意の薄笑ひを浮べ、人がそれに不快を感じて何かへコマすやうな事を云ふと誰も呶鳴りもしないのに「まあさ、さう呶鳴らんでも」と云つて笑ふ。笑へば必ず故意の冷笑である。いかなる場合にも冷笑することが人生で最も優越な事であると思ふ事にしてゐるらしい此男は、人情として笑ふ事が必ず不可能である場合にも必ず意識してヘラヘラと笑ふ。何がそんなにをかしいのかと訊けば「何もかもをかしいのだ。自分自身も可笑しいのだ」と答へて又笑ふ。無論決して本当にをかしいのではない。只をかしがる事が好きなのである。をかしがつてゐたいのである。そして又をかしがり度いために凡て人生一般の対象物をその冷嘲的となる下賤な階級迄引きずり降ろさずにはおかないのだから相手が不快がるのは無理はない。そして相手が苛立てば苛立つほど彼はます〳〵その犬儒主義を享楽する上に満足を感じて、相手が何でそんなに苛立つのか合点が行かぬやうな顔をして冷静にかまへるのみである。それが彼の「勝利」なのだ。

併し、今彼のくだ〳〵しい毒舌を聞いた者は、彼の冷かな犬儒趣味が決して単なる彼の興味から出るものではない事を容易く見抜き得たであらう。表面氷の如く見える彼の自己冷嘲の奥には苛立たしい刺があり、ひねくれた者の弱い火があつた。その火は彼の裏切つて蒼ざめた顔をぽつと赭くしてゐた。

「しかしとに角君は画家ですよ。僕は画家ではない。」

「夜鷹」と云ふやうな言葉をつかふ孫四郎の興味に例の厭

気を催しながらもその上気した顔を見ると何となく気の毒のやうな気がして、裕佐はかう云つた。
「低いなりにもな。ハ、ハ。わしは之丈けの絵商人さ。何と云つたつて。併しおぬしなぞは生れから云つてもわしなぞとは仕事の訳がちがはなけれやならん。それにまだ若いし――あせる事はないさ。些しも。」
何の親切気もない調子でかう云ふと彼は長い立て膝を抱へ乍らその冷却した顔を又横に向けた。
「此間の又兵衛張りの人物画はどうした。面白く行きさうだつたが。」
「駄目だ。ふむ。」
只「人物画」とは云はずに「又兵衛張りの」と一寸嫌がらせを附け加へずにはおかない彼の癖に、裕佐がかうぶつきら棒に応じたのを、孫四郎はなほ平然として訊いた。
「君、鋳物をやる気はないんかね。阿父さんの伝法でやつて行きや、忽ち日本一だが。」
「ふむ、誰もまだあの術を知つてゐるものは他にないからな。」裕佐は孫四郎の言葉の意を自分の方から云つた。
「あれでも其道のコツを飲み込む才がありさへしたら案外面白い、いゝ仕事が出来るもんぢやないかとわしは思ふがなあ。」
俺がやつたらと云ふ顔附きで孫四郎はかう云ひながら蒼い頤をなでた。
「さうも思へるが、どうも僕にや……」
「物足らんか。望みが太いでな。はゝ。」
かう云つて孫四郎は形だけの欠伸をした。
「姐さん。一寸出てみなされ。又お通りですよ。」
此時上り口の格子戸をガラリとあけて、かう娘の声が聞えた。
「あら、さう。もうそんな時刻でせうか。」
かう云つて細君は襖を開けて現はれ「萩原さん。一寸出て御覧なさらない。おいや？」と口についた糸を指で取つて丸めながら二人の方を向いて云つた。
「何です。」裕佐がかう云ふのを「丸山連さ。」と孫四郎は「知つてゐるくせに」と云はぬ許りに押へつけるやうに云つて、「おいやな事もなからう、切支丹ぢやなし。なア。」と裕佐の顔を流し眼に見て附け加へながら立ち上つた。
「でも貴方なんぞ御覧なさらない方がいゝわね、毒ですわ。」細君はむつつりと下を向いてゐる裕佐の方にかう云つて出て行つた。
異国に対して厳酷であると共に臆病であつた幕府は当時長崎在留の異国人の住居を出島の廓内に禁制すると共に、一方丸山の遊女を毎夜そこにつかはし、侍らしめて、紅毛人の歓心を買ふ事につとめてゐた。
雨の日も灯ともし頃になれば、三十人、四十人の遊女がさはればボロ〳〵と剝げて落ち相な粉飾に綺羅を尽し交代に順番に応じて、奉行から差遣の同心に駆られ、曳きずられて、丸山から出島へと練つて行くのであつた。そして其

の翌暁には前夜のそれとは見まがふ程の落剝した灰色の姿に変つて三々五々蕭条と又丸山へ戻つて行くのであつた。

「さあ、此方もそろ〳〵お出掛けなさるか。今夜こそ一ちよあれを描いてやらんにゃ。」

「何を。」と裕佐は「もう此処へは決して二度と来まい」と心に呟き乍ら云つて起ち上つた。

「おらんだ屋敷さ。『紅毛人遊興の図』だ。」

孫四郎はかういひ乍ら半紙を綴ぢた帳面を懐に入れ、矢立ての墨を更めて、腰にさすと変に興奮した体で衣紋掛けの羽織を取つて引つかけた。

「まあ、又お出かけ。萩原さん誘惑されないやうに用心なさいよ。」

出て来た夫の出で立ちを見ると細君は光る目で裕佐の方を見乍らかう云つた。

「へ、へ、誘惑されちやいけませんは皮肉だな。」孫四郎は延び上つて行列の方を見乍ら云つた。

「どうだ。一緒に行くか。童貞の青年。」

「いや僕は此処で失敬します、では又。」

裕佐は細君の方に向つてかう云ふと、薄暗い人込みの中にすぐ姿をかくして了つた。

三

「俺は弱過ぎる。なぜかう人を求めるのか。後で必ず後悔する事が分つてゐるのに。」

裕佐は何遍も自分にかう云つた。そして時々後ろを振り向いた。脊の高い孫四郎が群衆の上に延び上つて、その蒼ざめた小さな皮肉な顔で笑ひながらどこ迄も自分の跡を見送つてゐるやうな気がしてならなかつた。彼はその視線を背中に感じてムズ〳〵するやうに体を顫はした。

「行列を盗み見てゐるあの眼のあやしさを見ろ、わしが誘惑するもないもんだ。へ、あの猫被り奴。」こんな事を何もかも見抜いたやうな調子で細君に云つてゐる孫四郎を後ろに想像すると、彼はたまらない悪感を感じ乍らも、不思議にその予言に支配されるやうな気がしてならなかつた。

然し大股に急ぐ彼の歩調はいつの間にかのろくなり勝ちだつた。眠むくてたまらぬ者が気がついては眼を無理に開き乍らもつい居睡りをする様なものであつた。何とも云へぬ淋しさが重い黒雲の様に上から彼の頭を抑へつけてゐた。自分を信じない者が唯孫四郎に止まるなら「あんな奴に俺の何が分つて堪るものか」と平気でゐられる。併し孫四郎の冷たい表情の裏には同じ相好の運命の顔があるやうな気がした。それを自分の莫迦らしい気の故であるといかに思ひ、その不快な幻影を払ひ退けようと頭を打ち振り乍らも脳裡にこびりついた孫四郎の顔は只孫四郎の顔とは思へず、その皮肉は只孫四郎の皮肉とは思へなかつた。此方が力なく反抗すれば向うは更に恐ろしい声で「あいつに何が出来るか、へツへ！」と反響し相に思はれた。

彼はステッキで堅い地を叩き、咳払とも、叫びともつか

ぬ声をしぼり出して空を仰ぎ、そして歩いた。通りでは遊女の列にからかふ男の下等な笑ひ声や、甲高い気違ひじみた女の声が聞こえた。一種の本能で裕佐はその行列を見るのはいやだつた。それで小路に入つた。しかし何方へ向つて？　彼は自分の家の方へは行かなかつた。彦山の中腹を少し降りた処に父の建てた自分の古家。六十になる出戻りの伯母と二人で彼が住んでゐるその家には朝日はよく照るのだつた。日が照つてゐる間そこは彼にとつて真に落ちつける唯一の温い自家であり、「道場」であつた。彼はそこに祀つてある「伎芸天」と共に暮して少しも淋しくなく、孤独の楽しみに充実して酔つてゐる事が出来た。しかしそこは昼の家である。日が向ひの稲佐嶽に隠れて、眼下の町町にちらほら灯りが瞬き始め、さら〳〵と云ふ夕の肌寒い風が障子の穴から忍び込むが否や、彼に全く新しい第二の一日と世界とが始まり、彼は落ちつきを失ふのだつた。天上に二三の星が何かを招くやうにきらめき、地上にぽつぽつと明りが光りそめる事は朝赤児が眼を明くのと同じ新鮮な感じで彼ををのゝかすのであつた。かくて夜の世界の不安と寂寥と、戦慄と魅力とが魔の如く彼を襲ひ、捕へた。魔に捕へられる事は恐るべき苦痛であり、又寒い喜びであつた。何かが抵抗すべからざる力で若い彼の心臓を湧き立たせ、真昼の端正な「伎芸天」迄が妖艶、婀娜な姿に変じて燃える眼で彼を内から外へ誘ひ駆りたてるのであつた。

その家に帰る事は思つた丈けでも恐ろしい苦痛な事であつた。それが苦痛でなくなる迄彼は外で、夜の世界で、疲れ切らなければならなかつた。

彼は大波止の海岸の方へ向つて浜から来る汐臭い秋風に顫へながら歩いた。毎も其処を通る毎に癖のやうに引きずられて立寄るシナ店の前をも彼は今気がつかずに通り越してゐた。

彼は海岸へ出た。蕭条たる十一月の浜辺には人影一つなく、黒い上げ汐の上をペラ〳〵と撫で来る冷風のみが灯りを点けた幾十の苫舟を玩具のやうに飜弄してゐた。岸に沿つて彎曲してゐる防波堤の石に腰かけて杖を垂らせばその先きの一二寸は楽に海水にひたる。犇々と上げくる秋の汐は廂のない屋根舟を木の葉のやうに軽くあふつて往来と同じ水準にまで擡げてゐる――彼はそこに腰をかけた。

海に突き出して一つの城廓のやうに館が右手に見える。点々たる星の空の下にクツキリと四角に浮き出すその家の広間の中は、煌々としてどの位明るいのかと想はれる。たしかに白昼よりも明るいにちがひない。しかも何と云ふ物物しい、無気味な明るさであらう。そこには人の家らしい落ちつきや、幸福は微塵もない。島を囲む黒い漣がぴたぴたとその礁を洗ふ如くに、夜よりも闇い無数の房々がその明るい大広間を取り巻いてゐる。そこからは落寞たる歓楽の絃歌が聞こえ、干乾びた寂しい笑ひ声が賑やかに洩れて来る。――それは普通和蘭屋敷と呼ばれてゐる「出島の蘭館」である。

裕佐はその異様な家の方に向つて歩き出した。そして歩き乍ら彼はキヨロ〳〵と四辺を物色した。孫四郎を彼は探してゐたのである。出島へ渡る為めには艀に乗らなければならない。艀の渡し守は奉行から遣はされてゐる侍である。異国人と、遊女と、仏僧の外そこへ行く事の許されぬ禁錮の島へ孫四郎の行く訳はない。「どうせ嘘にきまつてゐる。あの道楽者が今更らしくこんな処へ絵なぞ描きに来るものか。」と彼は思つた。しかしさう思つて振り返つた瞬間、彼は大きな、白い、首の長い一つの顔を見たやうな気がしてギヨツとした。彼は身顫ひし、そして怖い物見たさのやうにもう一度それを見た。それは番小屋の後ろから高く首のやうに突き出た新しい白木の高札であつた。

ばてれんの訴人　銀三百枚
いるまんの訴人　銀二百枚
立ちかへり者の訴人　同　断
同宿並にかくし置き他より顕はるるに於ては——云々

の文句が威脅するやうに墨黒々とそれに書かれてゐる。それは人間の書いた字ではなく、鬼の書いた字のやうに思はれた。「ばてれん」とは教父、宣教師の事であり、「いるまん」とは法の兄弟即ち準宣教師の事であり、「立ちかへり者」とは一旦宗門を転んで再び切支丹に帰つた者のことである。

「誰だ。」歩いてゐた侍は寒むさうに腕をこすり乍ら訊いた。

裕佐は返事をしなかつた。

「何者だ。」

「鋳物師だ。」

「鋳物師とは何だ。」

「銅を鋳る工匠だ。」

「銅を鋳る。そして何をつくる。」

「何でも、富士山でも、君の首でもつくる。」裕佐は一寸からかひ度い気持ちになつた。

「貴様よく来るな。島へ行き度いのか。」

「或る女を見度いんだ。だけど行つちや上げないよ。」

そして彼が去らうとした時、眼の前にあつて手に取るやうに猥らな高声の聞こえて来る和蘭屋敷の二階に女の叫び声が聞こえて、けたゝましい跫音と同時に大きな菊の鉢が窓から落ちた。そして石に砕ける音がした。一時森とした後、猫を抱いた日本の女の小さい顔と、その上にのしかゝつた恐ろしく巨きな毛むくぢやらの男の顔とが現はれ、そして彼等は何かいがみ合ひ乍ら笑つて、赤いカーテンをおろした。

四

「あなた、もしや——これではなくつて？」

女はふつくらした人差し指で膝の上に十字を描いた。

「何だ、それは。」男は眼を円るくして女の顔を凝視した。

「これよ。」と女は又書いた。「分つてらつしやるくせに。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.